

資料室だより 134

マドリガーレの作曲者として有名な Giaches de Wert(1535-1596)のモテット”Vox in Rama”の実用楽譜を購入しました。膨大な数のマドリガーレを作曲しているヴェルトは世俗作品の印象が強いのですが、この Vox in Rama (ラマで泣き声が聞こえる)は「幼子殉教者」の日に子供が殺された母の心として歌われるものです。イエスが生まれたとき、ベツレヘムの2歳以下の男の子を皆殺しにするというヘロデ王の残虐な事件があったということが史実かどうかは別としてマタイ福音書2章16節に降誕物語の一部として記されています。

テキストは典礼的には12月28日「幼子殉教者の祝日」のミサの聖体拝領唱です。この日は降誕節の半ばにあります。クリスマスを大喜びのうちに迎えたあとなぜこんなに悲しい歌を歌うのかと思われるかもしれません。人間は誕生から始まりますから誕生はおめでたい。しかし神は最初から在りて在るお方なので誕生によって初めて存在したのではなくこの世への誕生はイエスにとっては人の姿をとるという「受肉」-神のへりくだりを意味します。すなわち受難に結び付いています。クリスマス直後にこの幼子殉教者の日があるのは意義深いことだと思います。この世の不条理と悲惨のまっただなかにイエスが生まれ、ヘロデの欲望渦巻く世界に生まれ私達と共におられるのだということを黙想するのがクリスマスです。テキストの内容は以下です。

Vox in Rama audita est, ploratus et ululatus multus

ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ

Rachel plorans filius suos

ラケルは子供たちのことで泣き

Et noluit consolari, quia non sunt 慰めてもらおうともしない。子供たちがもういないから

ラマはヘブライの民がバビロン捕囚に連れていかれる出発点となった地名です。囚われ人の生活が始まる。そのラマでラケルが泣いている、と言っても実際にラケルは自分の息子が死んで泣いているのではないのです。イスラエル民族の母として、息子たち、部族の者たちが失われるのを泣いているのであって個人的な嘆きではありません。このラケルの涙が嬰兒虐殺の場面に母親の気持ちとして重ねられていきます。なぜこれがクリスマスに関連があるかと言いますと、マタイ福音書のこの部分は旧約聖書エレミア書31章15節からの引用です。その続きには「泣きやむがよい、(中略)あなたの未来には希望がある、息子たちは自分の国に帰って来る。」という励ましがついています。つまりエレミアの預言がキリストの到来、すなわち失われることのない恒久的な希望を語っています。子供を亡くしたものの涙が拭い去られる時が来る、ラケルの子供たちがバビロン捕囚から帰ったように。

クリスマスのシーンに挿入されるこの悲劇は救済史における降誕の秘儀です。それを音楽で美しく表現しているのがこのモテットです。

(杉本ゆり 記)